

◆2010年 4月

八木健選 「七句」・・・（七七をつけて見ました）

- 1 卒業期よい先生は出世せず （飯塚ひろし）  
・・・要領のよい先生は出世して
- 2 受付嬢みんなマスクの大病院 （井口夏子）  
・・・ひよつとして受付嬢は出つ歯かも
- 3 愛の日の妻から貰う小言かな （西をさむ）  
・・・「の」でなくて「も」かも知れぬぞ
- 4 目に物を言はせて居りぬマスク （高橋マキコ）  
・・・目に物を言はせるためのマスクとも
- 5 鳥帰る日本のパンの味覚え （彦坂義久）  
・・・鳥渡る日本のパンを食ひたくて
- 6 深呼吸したばつかりに春の風邪 （有富洋二）  
・・・息をとめることだな風邪を防ぐには
- 7 鬼多く福豆足りぬ憂き世かな （森 要）  
・・・羨まし鬼に豆遣るてふゆとり

青山桂一  
春耕や隅は残せりトラクター  
未黒野と言へぬ程度の畦整理  
これ以上背伸びできぬと大根どち

高田敏男  
ストレスを詰めて飛ばしたしやぼん玉  
飼犬の寝そべる軒や涅槃寺  
焼加減心得妻の春日傘

秋月裕子  
網膜を診られて転ぶ霜柱  
靄晴れて明石海峡春景色  
きびしい季のなつかしさ辛夷の芽

高橋マキコ  
水鳥は悲しからずや離れ浮き  
めくれるがごと桃の花開く時  
目に物を言はせて居りぬマスク

麻生やよひ  
佐保姫の研修中とて遅れ気味  
銀ブラのエルメス素通り春寒し

高橋 都  
しじま破る老の一発大きくさめ  
春コスメどれにしよかと母卒寿

腰痛と鬱潜り抜け二月尽

春一番滑稽考え皺がふえ

足立淑子

草矢射る少年の夢まだ続く  
発酵を待つパン生地と薔薇の雨  
靴ひもを結び直して岩清水

高橋素子

大掃除に汚れきつたるMY雑巾  
混浴の足の触れ合ふはだれ雪  
針供養豆腐とうたうハリフグに

有富洋二

割り勘の人数数え蜆汁  
鶯のやる気半分朝稽古  
深呼吸したばつかりに春の風邪

高松雄三

妻ばかり出掛ける日々や女正月  
孫の手で年金生活事始  
畳目を頬にプリント春炬燵

有吉堅二

穴を出し蛇引き返す濁世かな  
狢犬の鼻のうごめく花粉症  
耳の日や百人百様耳の形

田中章子

ひらがなの流るる様なり春がすみ  
流し雛波越す時も離れずに  
ぼけかけし夫婦のつまむ雛あられ

安藤淑子

柚子植えて八十路の婆のため息す  
ハーモニカ吹く蝶蝶の曲八長調  
昭和一桁未だ靴下繕つて

種谷良二

朝帰り今朝は女雛が夜叉に見え  
迷走する政治主導や目刺し焼く  
雁風呂を反捕鯨国知りをるか

飯塚ひろし

五つほど歳に鯖読み霞みけり  
ちんぼこの児もかぐはしき春の泥  
卒業期よい先生は出世せず

田村米生

落の臺にがみ走つたいい型  
田楽の串数へあふ夫婦かな  
啓蟄や奥歯に虫のとりつきし

井口寿々子

受験期や社の鈴の高く低く  
鬼は外子供の声の透き通る  
ドロップの缶をとび出す春の色

飛田正勝

卒業の子を先生と奉る  
一〇五円せびる五歳の入園児  
春愁ふ愛しき太めの女身仏

井口夏子

受付嬢みんなマスクの大病院  
幸せといゆ炬燵の中のひとところ  
虎落笛あれば掴むよ太き腕

中岡久美子

露天湯に肌ほてらせる春うらら  
役者ならこそ春雨の蛇目傘  
二股短足菜園の大根は

池田無了  
何事ぞ梅見る老の大カメラ  
大入道の恋の句少女悶絶す  
一句出来たと厠とびだすほととぎす

伊藤浩睦  
冴返る天にシリウス地にプリウス  
子は緊張実は定員割る入試  
内裏雛おなべのような顔をして

稲沢進一  
とりあへず己が道行くスケート場  
鯛焼の目と目の会ひて買ひにけり  
春寒しすぐ立ち上がるトースター

井野ひろみ  
屋根の雪ドスンと落ちて驚かす  
カーテンに陽の日浴びて朝寝かな  
小春日に建売の旗乱立す

今城夏枝  
春昼や墓標のやうにビル並ぶ  
はうれんさうの一把を余すふたりかな  
ふきのたうみどりに紫重ね着て

越前春生  
泣きどころばかりが増えて春寒し  
恋人のほしきバレンタインの日  
好奇心いつでも出番山笑ふ

奥脇弘久  
鬼の面外して共に豆を撒く  
不信感拭ひきれずに春立てり  
猫二匹ひと待ち顔に梅見茶屋

大杉文夫  
尼寺の火種となりし落椿  
永き日やしゃべる機械で記帳せり  
蛙鳴く笑っているのかも知れず

永井一朗  
愛敬のしくじりもさせ猿回し  
追儼会の鬼にあてがふ鬼ころし  
袖の張り夜はゆるめる夫婦雛

永島董玉  
鬼やらひ仕事の鬼が早帰り  
紅梅に白髪の人佇みて  
身動きもせずに初音の二の矢待つ

西 をさむ  
愛の日の妻から貰う小言かな  
絹代よりモンロー好きの春一番  
与三郎と名乗る我が家の浮かれ猫

原田 暉  
父も子もその家の犬もちやんちやんこ  
ぼつねんと懐炉の遺る座席かな  
凧をりに眠たき目を覚ます

彦阪義久  
死の灰と思える程に杉花粉  
勉強をしすぎた挙句卒業す  
鳥帰る日本のパンの味覚え

久松久子  
冤罪の狸生涯檻の中  
檻の狐木の葉になつて逃げぬのか  
動物園にもしかの地震悴みぬ

日根野聖子  
節分や赤鬼青鬼胸に飼ひ  
熱湯に染め直されし菝葜草  
いないいないばあと顔出し落の臺

藤岡蒼樹  
啓蟄や砂風呂砂に埋まりある  
慰問するなんきんすだれ柳の芽  
服たたみ抽斗奥に卒業日

岡部一兆

泣くな龍祖国のオバマに夏手前  
墨染めのチリン椀出す旧正月  
庭木刈る粋な職人姉言葉

藤森荘吉

ペンギンがマフラーしてる夢をみた  
重箱の隅に見つける小さき春  
浅き春軽いいびきと共にあり

笠 政人

着ぶくれの五人詰め合ふ一人分  
番犬をおどろかしたる猫の恋  
雲を恋ひ雲にどどかぬ雲雀かな

藤原セツ子

冬ざれの音立て紙を引き裂きぬ  
吾が妻に角のあるなり鬼やらひ  
糊こぼし今年も届き御水取

可知豊親

春愁を装ふひと日宿酔  
お白酒妻と娘が管を巻く  
引鶴を仰ぎ引き摺る旅鞆

二神重則

春句会人それぞれのプロファイル  
つくしつみ捜せば見えず月の如  
春の夢毎年買つて時刻表

加藤澄子

独り居の夜の家揺らし春一番  
雛飾る今日の雨水を待ちわびて  
落椿ご飯のように春の雪

坊野留吉

ゼロ金利円におののく蘆の角  
都忘れ生涯田舎ぐらしかな  
消防車よく似た朝の猫の恋

加藤 賢

芽柳やわれに古りたる恋女房  
恋猫の木に爪研ぐは心意気  
岸辺まで草払はれて鴨の恋

前川敏夫

下萌やタックスフンドの腹かゆし  
海老で鯛釣る気のパレンタインデー  
公達の顔で出てくる雛の市

川島智子

下痢よりも便秘の辛し寒厠  
寒中のラジオ体操床の中  
春雪に転け照れ笑ひして起きる

松尾軍治

ねんねこの犬が寝息をたてており  
トイレより紙の催促初笑  
悪ガキや鼻タレ泣きて卒業す

北村真佐子

名残雪真つ正直に肩で消え  
バレンタインチョコにひれ伏し一億人  
地虫やあい地上の星が待つている

松田吉憲

春愁の固つてゐる喉仏  
大安も仏滅もなく地虫出づ  
落椿万有引力の一つ

久我正明

裸木の股に古巣を置きにけり  
湯豆腐の蛋白体質肥満体

丸山紘一

撒く豆は落花生とやエコの御世  
氷上のストーン追ふ娘の眼は豹ぞ

寒気団窓の硝子の多汗症

「サクラサク」満願成就の花便り

草薙一朗

角砂糖ほどの義理チョコバレンタイン  
大試験窓際族に機会なし  
覚え切れぬ神の長き名建国日

三塚不二

恋の猫橋の端ゆく野良のさが  
春光を蹴散らし釜の潮滾る  
籠城もいつまで続く花粉症

工藤泰子

冴え返り冴え返りたるさざれ石  
鷹鳩と化して雲太は十六丈  
口承の古代神殿竜の玉

三橋一笑

何回も殺られて嬉し雪合戦  
雛段に毬飛んで来て大わらは  
ここだよと隠れんぼの子土筆振る

倉方 稔

風見鶏けふは好調風光る  
お役所のバカ丁寧な納税期  
地雷無き世を願いつつ青き踏む

虫倉蟬音

お花見の留守居佻気な茶碗酒  
さめざめと浅蜩呟く命乞い  
春なれど年古りものを思はざり

黒澤正行

ピンチピンチ地球ピンチと揚ひばり  
恋猫の道路鏡に尾を立てて  
恋猫の最後は首に食らいつく

むつみ

二人して一人前の納税期  
金婚の妻を励ます桜草  
馬止めや車止めある遍路道

黒田忠一

恋の猫朝まで乱れ厚化粧  
足元に亀裂近づく雪解川  
虎視眈眈妻の遠出の春を待つ

村上美和

下萌や犬は一本足あげて  
姦しく見上げる梅の蕾たわわ  
下萌や尻もちをつく児のあゆみ

小杉 隆

梅咲いて隣の芝の青き越ゆ  
狸汁ぐるり囲みし大胡座  
大根引き五十年昔の安保かな

百千草

地虫出づはにかみ顔に日を浴びて  
もしかして死は掌中に種を選ぶ  
追伸に本音がちらり春の雷

桜井宇久夫

豆撒や千手観音堂の内  
春の坂上りて雲をさがしをり  
杉花粉うらみつらみと降りかかる

森岡香代子

春霞山をたたいて道しるべ  
菜の花や山を抱きしめ登りおり  
朧月うさぎのもらすため息か

佐藤古城

パソコンを幼に習ひ瀬祭

森 要

春立つも春駒起たず腹が立つ

桜肉紅葉鍋喰ひ馬鹿兆す  
摩羅と言ふ厄介者や犬陰囊

鬼多く福豆足りぬ憂き世かな  
寒い中熱き呼び声甘酒屋

佐藤義子  
芸達者孫に取られねた捜し  
停電で主役のローソク演じきる  
近づいて昼寝のネコの邪魔をする  
佐野萬里子  
檜の香立つ宇治橋鳥居は古きまま  
神宮の春神鶏は樹の上に  
参進の神馬の糞に湯気著し

八木 健  
とれたてのみずのふんだん春の川  
山の端はステージの袖鳥帰る  
飛び越えてごらんと流れ春の川  
柳澤京子  
春陽射す尻出す夫は知りません  
藪医者や足切断の逃る春  
世の変る柑橘皮のむくめんどう

柴田真一  
寝坊して地顔かくしのマスクと帽  
決算期間近に迫る鉦叩  
ヘソクリは利息のつかぬ春を待つ

山内重昭  
春暁の浅き夢散る震度三  
園児らはお昼寝タイム桃の花  
ポケモンもガンダムもゐて雛の家

清水吞舟  
防人のやうな転勤春コート  
無頼なる祖父の緋裏のインパネス  
猫呼べは妻の応へて豆ごはん

山下正純  
古傷に沁む寒柝や置宿  
鬼福と投げられ食はれ豆柱  
枝振りの年深みかも梅の花

首藤虎男  
カナダより女神手渡し始金席  
筍は子を食べ眞竹鯉吊るや  
畑荒れてあと芽無きしと指をさす

山本あかね  
つやつやの豚耳豚足山笑ふ  
携帯の中国語なり春節祭  
恋猫の一カラットの目の光る

壽命秀次  
初夢の覗きつ覚むる谷間かな  
ちよい呆けの元デカ長のちやんちやんこ  
エコヘッド感謝感謝の冬帽子

山本けい子  
牡蠣の食べ放題といふツアーかな  
車椅子漕ぐや寒風に逆らひて  
友の死を悼んで鳴くや寒鴉

白井道義  
長椅子の端と端とに日向ぼこ  
湯豆腐や余白の隅にある余生  
予備校のとなり予備校戻返る

山本 賜  
にはとりの赤いとさかや桃の里  
クスノキを囲みぼちぼち咲くしどみ  
春の雪食卓に置くちぢみ焼

杉村福郎  
せせらぎの録音聞けり猫柳

横山喜三郎  
乙女らと混浴うらけし足湯

段々を登れば平ら春浅し  
かたかごの花は飛び立つ用意して

角だせば褒められてをり蝸牛  
花筵幼も酔ふた振りをする

鈴木和枝  
達磨市のだるまになつてしまいそう  
百舌に食べられてたまるか力作の菜  
横文字で鳴く百舌よ何があつたの

吉野香世子  
良い所のゆけを吹雪のその中へ  
ナイターの余光もらいて冬耕す  
寒鯉の身のほどと言ふ泥をかく

鈴木 清  
春風や綿毛追いつつ友を訪う  
鵜と鷗碁石の如く川中に  
暇みつけ行水にゆくカワガラス

吉田恵子  
露の臺丸かじりする人のみて  
花冷えや車のままの花見人  
春告鳥上手く鳴けよと力瘤

鈴木 榮  
春遅し通帳の利子二桁なり  
大試験オクラ納豆とろろ飯  
春昼や太る白猫大欠伸

渡辺さだを  
露天湯に雁首そろひ山笑ふ  
春一番鷄空を翔けてゆき  
航行の音もけだるき春の闇

渡邊美代子  
久しぶり鰯起しきく海の宿  
出合い橋戻り橋あり春の雨  
花開く露天商人荷をひらく